

“おもしろくて ためになる 学びの共有”

秋田県教育カウンセラー協会機関誌

教育カウンセラー

あきた

14号

2007年（平成19年）11月23日発行

ことばのちから

秋田県教育カウンセラー協会

代表 水戸谷貞夫

今年、例年にみられない様々のできごとが多かった。創立80周年の記念式典、県内でもみられた創立60周年の式典（いわゆる新制と言われる中学校で、昭和22年3月31日法律第26号の学校教育法で発足したもの）、秋田若杉国体などである。

これらの式典に出席して、主催者のあいさつ、来賓の方の祝辞、中学生やその卒業生、保護者や関係者の方々の言葉をうかがううちに、言葉の持つ大きさに改めて気付かされた。言葉の持つ力を忘れたわけではないが、言葉をもっともっと大事にすることによって、荒んでいると指摘されている現在の社会を、望ましい方向に立て直すことに役立つことを信じていた気持ちになっていた。

中学生や卒業生から、教えていただいた先生の言葉に力づけられ、励まされたなどの例が多く聞かされ、なかには還暦を過ぎた方からの思い出話には、思わず目頭が熱くなったことも数多くあった。

育ちつつある青少年の多くは、みんなの前でほめられたこと、初めて認められる言葉をいただいたこと、慰められたこと、励まされたことなどは、終生忘れられないものであることを、

教育に関わりを持つ者として忘れた

くないと思うものである。ある雑誌の巻頭コラム（注）に経済界で活躍された多くの方々が人生哲学に相当する言葉を述べていたことを思い出し、言葉の大切さをかみしめている。

近年、カタカナで表現される外来語が増えて、読んだり、聞いたりしてもよくわからないと言われる方が増えたとの指摘もある。私どもが何げなく使っているものには、日本語になっているものも少なくない。（野球の用語が好例であろう。）しかし、青少年や他の方をほめたり、励ましたり、あるいは讃えたりする場合には、従来からある日本語を使うようにする心掛けが必要であると考え。（勲章の勲記は外来語では困る方もおられると思う。）

今、私が大事にしている言葉は、隣県奥州市出身の後藤新平氏が残されたものである。後藤氏生誕150年に当たるので、記念シンポジウムが開かれたと聞いているが、病院長、内務省衛生局長、満鉄初代総裁、内務大臣、外務大臣、東京市長などを歴任された方で、台湾総督府長官の時に、新渡戸稲造博士を登用したことで有名である。その言葉は、「金を残して死ぬ者は下だ。仕事を残して死ぬ者は中だ。人を残して死ぬ者は上だ。」というものである。

（注）日経ビジネス誌のコラム「有訓無訓」は、単行本にまとめられ、「時代を超える言葉」として刊行された。

「養成講座の感想」からのピックアップ特集

養成講座に参加し、たくさんの学びを得た方々からの声をまとめました。

《開業カウンセラー Aさん》

養成講座については、とにかく「楽しかった」という印象が強く残っています。

私は自分のオフィスでのカウンセリングの他、スクールカウンセラーや企業の契約カウンセラーとしても活動していますが、特にSGEの知識やスキルが、学校での教職員研修に役立っていると感じています。生徒へのグループワークでも、養成講座で学んだことは使えるな、との手応えを持っていました。

企業での活動では、まだ十分に活かしきれていませんが、労働者でもある「教職員」に効果大なので、使えないワケはない。産業領域でのSGEが、現在の私のテーマの一つです。

《医療技術者（養成指導者） Bさん》

秋田県での第1回目の講座に参加しました。非行予防エクササイズと、SGEの体験講座を良く覚えています。優しい話し方のSGEの講師は、アナウンサーのような流暢な語り口で、その声を聞いているだけで気持ちよくなりました。

私は医療の現場で働いていますが、養成講座で学んだSGE等は、そのまま患者様相手には使っていません。SGEに限らず、教育カウンセリングの諸技法は対等な人間関係が前提になるように思うのです。以前に較べればインフォームドコンセントも認知されるようになってきましたが、まだ治療者－患者関係には上下があるように感じ、ためられるのです。

私はまた、後進の指導という仕事もしており、学生相手では大いに役立っています。現代の医療では、単なる技術的サービスではなく、患者様との人間関係作りを基盤とする「心の医療」が求められています。そう出来るようになる為には学生への「心の教育」が必要で、それには教育カウンセリングのアプローチが有効と思っています。

《高専スクールカウンセラー Cさん》

私が初めて養成講座に参加したのは、大学院生の時でした。それから毎年欠かさずに受講しています。時には県外の講座も受講することもあります。どの会場でも熱い思いを持って「教育カウンセリング」を志す仲間と出会うことができ、自分にとっての刺激になっています。

養成講座の科目は、どれも面白く勉強になりますが、特にアサーションを学んだことがスクールカウンセラーの仕事に役立っていると感じています。学生の時理論として把握していたことも、実践の場を持ったことで体験としても気付けるようになりました。

この養成講座では、教師をはじめ、自分とは異なる様々な専門性を持つ人達が受講します。その人達と交流することで、自分の実践を別の視点から眺めることができたり、時にはねぎらってもらって元気になることも出来ます。

私にとっての養成講座は、年に1回、初心に戻って研鑽への気持ちを新たに、大切な機会になっています。

☆カウンセリング・トピックス 「事例研究について」

事例研究とは、実際の事例（ケース）に関して、「ある程度相談が進んだ、もしくは終了した段階において、その経過を振り返り、カウンセラー－クライアント関係を考え検討すること」である。「ケース・スタディ」とも言われる。

事例研究には多様な意義があるが、「クライアント（来談者・児童生徒・保護者etc.）の為」「カウンセラー（相談員・援助者・教師etc.）の為」という視点から、2つに大別できるだろう。

事例研究を行うことでのクライアントのメリットは、より良い援助を受けられる、ということである。相談関係が終了した段階でなく、「ある程度進んだ段階」で事例研究が行われるならば、ケースへの理解が深まり、その後の相談活動の向上が期待できる。カウンセラーは個々のケースについて、普段から（面接の都度）考えているものだが、事例研究の形式で改めて再検討すると、他の研究メンバーから指摘されたり、自分自身を客観視したりすることで、今まで分からなかった点に気付けることも少なくない。

終了した段階での事例研究も「クライアントのため」になる。すでに相談関係が終わってしまった「過去のクライアント」に遡ってメリットをもたらすことはないが、これから同じような問題・悩みを持ってカウンセリング場面に登場する「未来のクライアント」に、質の高い支援をすることができるだろう。

カウンセリングは個別性を重視するので、いかに類似ケースであっても「Aさんの問題は、Aさんだけのモノ。Bさんの問題とは違う」との前提に立つが、個別の事例を深く研究すると「普遍性」を持つようにもなる。個々の事例を検討し、そこで得られた知見についての発表・報告が積み重ねられるならば、そこから新たな「法則」や「カウンセリング技法」が生まれる可能性もあるのだ。

事例研究によるカウンセラーのメリットは、前項「クライアントのメリット」と表裏一体と言える。まず、継続ケースであるならば、相談活動での「より良い支援」が考えられる。新たな気付き・対応のヒントを得られることで、それが可能になる…というだけでなく、事例研究をすることでカウンセラーが支えられ、エンパワメントされるという面も大きい。仮に、事例研究で何一つ「新たな気付き」が得られなかったとしても、「今までの見立ては間違いではなかった」「このような支援を続けるしかない」のように方向性を再確認できるなら、カウンセラー自身が安心・安定し、自信を持って臨めるようになるだろう。カウンセラー側の安心・安定は、すなわち支援の向上に繋がるのだ。

継続ケース・終了ケースに限らず、事例研究はカウンセラーにとってトレーニングの意味もある。特に、まだ相談事例を持っていない学生や、経験の浅い初心者にとって、現実のケースに触れることが出来る「事例研究会」は、貴重な教育研修の機会になるはずだ。教科書での学習では身に付け難い「実戦のセンス」を養うのに、事例研究は大いに役立つ学習法である。

事例研究を行う上では、プライバシーの保護にも留意したい。事例研究のデータは、すべて高度に私的なものであり、プライバシーの範囲は本人ばかりでなく家族にまで及ぶことがある。データをよく吟味し、必要最小限の情報に絞り込み、氏名をふせるなど個人を特定できないような配慮・工夫をすることが求められる。

また、事例研究会のように複数のメンバーがケースの情報に接する場合は、参加者に守秘を確認したり、資料を持ち出させない（回収する）等、プライバシー保護への配慮をより徹底させることが必要である。

浅沼 知一(協会理事・上級教育カウンセラー)

☆☆ Q-U学習会ウィンター1日研修のご案内 ☆☆

『教育相談事業の企画と運営』【講師：苅間澤勇人先生（学校心理士）】

～講師の先生より～

今回の研修は、教育相談課10年（進路指導兼務5年）の経験に基づいて、教育相談活動(事業)を推進する際のポイントを、参加のみなさんと一緒に検討してみたいと思います。

教育相談課の活動は生徒との面接が主だと思われる方が多いと思います。しかし、何がしかの悩みを抱えて面接を申し出る生徒は年に数人です。むしろ、予防・開発的な援助（指導）が教育相談課の主たる業務です（この業務を怠るととても快適な分掌なのですが…）。個別面接とは比べものにならない程の時間を、ピアサポート（SGEと性教育を合わせた活動）、キャリア教育、ライフスキル教育（保健劇）、チーム援助、BBS（Big Brothers and Sisters）などの教育活動に費やしています。これらの教育活動は、生徒が抱える課題と学校のリソースをアセスメントして、実施できるものを選んで行った活動です。カウンセラーの役割で表現すると、グループカウンセリング、コンサルテーション、コーディネーション、アセスメントと言われます。カウンセリングを生徒の発達や社会化に生かしており、國分康孝先生が「教育カウンセリング」と呼ぶものに該当すると思います。

私の教育活動の紹介だけで終わらず、すなわち「何が教育カウンセリングか」という説明から一歩踏み込み、経験を概念化して教育相談活動を推進するために必要なスキルとして「〇〇力」という形で表してみたいと思います。「教育カウンセリングで学校を変えたい」と考えている先生方に役立つ話ができるようにしたいと思います。そのために、時間配分を工夫し、参加のみなさんからの質問に答えたり、意見を出してもらったりして進めていきます。

1. 会場： 遊学舎 第1研修室

2. 学習会内容：

午前 構成的グループ・エンカウンター

「Q-U」「K-13法」を用いた事例研究（小学校の事例）

午後 カウンセリング講義・演習『教育相談事業の企画と運営』

3. 申込み：下記の事項を記入し、メールかFAXにてお送りください。

①氏名、②勤務先、③連絡先住所、④電話番号、⑤FAX番号、⑥メールアドレス、⑦参加希望（午前のみ・午後のみ・1日希望）、⑧お弁当注文の有無

E-mail： jeca_akita@yahoo.co.jp FAX番号：0138-84-8032

4. 参加費： 2,000円（資料代、茶菓子代） ※お弁当代1,000円

5. 申込み〆切：2008年1月8日（火）

編・集・後・記

秋は、さまざまな研修会に参加する機会が多い時期ですね。研修の場は、自分をみがき、さらには自分の世界を大きく広げるものになるのだと感じるこの頃です。これからも、貴重な学びの場を大切にしながら、皆さんと共に、大いに学び合いましょう。（N）